

## 詩人ミールに就て

今回詩人ミールを取りあげたのは、一昨年の大会でウルドゥーの代表的な詩人であるミルザー・ガリブに就て発表したことに関連して、ウルドゥー叙情詩の巨匠としてガリブと並び称されているミールに就てもまた紹介しておくことが必要であると考えたからである。

ミールとガリブ、この二人はウルドゥー叙情詩の二大詩人として他に抜んでた存在ではあるが、この両者はその性格に於ても実生活にあつても極めて対象的な人物であり、仮にミールを陰とすればガリブは陽ということが出来るほどに陰陽の差が判然と現われている。特にミールの場合にはその詩に表現されている思想が彼自身の人生により密着しているという点で詩人と作品との関係を研究してゆく上で非常に興味がある。此処では先ずミールの生涯に就て簡単に述べ、次にその作品に触れることにする。

ミールは本名をミール・ムハンマド・タキーといふ一七二二年にインドのアーグラで生まれた。彼の先祖はヘジャーズ

## 鈴木 斌

の人でその後デカンの地に移り曾祖父の時にアーグラに来て定住するに至つたようである。父親は名前をミール・ムハンマド・アリーといふ世俗の事に無関心なスーフィー的人物でありいつも神を念じては涙を流していたという。この父親の熱烈な弟子にアマースラーという者がおり、ミールにコランを教えまた托鉢僧との交わりに常に彼を伴なつていつた。ミールが十才の頃にこのアマースラーが死に、ついですぐに父親にも死別する。こうしてミールは彼の少年期の性格形成に非常に大きな影響を与えた二人の人物を相次いで失ない人生の苦痛や死ということを深く知らされる。ミールは早い時期に母を失ない父親は再婚していたが、保護者であつた父親の死で継母や異母兄弟たちがミールに辛く当るようになる。この頃ミールは親戚の娘と恋愛を失恋して一時的に気が狂つた状態になる。この彼の精神異常という事件に関しては注意が払われねばならない。やがて十七才の頃にミールは到頭異母兄に家を追い出される。その結果デリーに上り継

母の弟にあたる叔父のスイラー・ジウツディーン・アリー・ハーン・アールズを頼つて彼の下に身を寄せる。このアールズという人物は当時のデリーで最も有名なペルシャ詩人であり、ハーティムなどと共にデリー派初期のウルドゥー詩人でもあるが、この叔父アールズとの出遭いと当時のデリーの詩的環境によつてミールは生来の詩的才能を触発されたとするのがアブドゥル・ハックの解釈である。一方で、ナクデ・ミールなどの優れたミール研究書を表わしているサイヤッド・アブドゥッラーによると、やがてこのアールズも甥の手紙による告げ口——親戚の娘との恋愛問題が主であつたという——などによつてミールを追い出し、こうした困窮と失意の中からミールの詩作が始まつたのであると説明されている。いづれにせよミールが詩を詠み始めたのはデリーに上つて叔父アールズと会つた頃からであり、これ以後に詩人としての彼の歩みが始まつた点でこのアールズの存在が大きな影響を与えたことは否定できない所であらうと思う。

こうして詩人として世に出たミールではあつたが、生活上では相変らずの非常な窮迫の内にあり、職を求めているいろと苦勞を重ねる。元来、詩人が詩業のみによつて生活していけるためには彼が王侯、貴族など有力なパトロンの被護を受けることが必要である。ミールと同時代の大詩人で「ミールとサウダーの時代」というように同列に語られている詩人

サウダーを見ると、彼がムガル朝のシャー・アーラムから始まつてアワドのナワーブ・アーサフッダウラーに至る迄常に強力なパトロンを得て生きていたことが分かる。それ故にカスィーダと呼ばれる頌詩の分野がウルドゥー詩の中で一つの重要な領域を占めているわけであり、多くの詩人がこの分野にも手を染めていたのであつて、特にサウダーは彼のカスィーダによつて最も著名となつたのである。ミールの場合には、このパトロンを見出し彼のためにカスィーダを捧げたりしながら一方で自分の詩人としての位置の安定を計るといふことがうまくできなかったわけである。そしてその原因は主として彼の性格そのものにあつたといふことができる。次にその性格について見てみよう。

ミールは非常に自尊心が強く、自己中心的で、またペシムスティックな暗さに支配されている。そしてこうした性向がこの人生を苦しみと悲しみの場であると見る彼の人生観を作りあげている。このような考え方はそつくりそのまゝ彼の詩の上に表わされていくのである。例えばミールの有名な詩の一節に「ミールよ、私を詩人などと呼ばないでくれ、私はたゞ苦痛と悲哀を集め集めただけに、そしてそれが詩集となつただけなのだ」といふ言葉があるが、これなどはミール自身によつてミールの詩の本質を最も良くいゝ表わしているものといえよう。

ミールの人生觀の形成に就ては、それが彼の少年期を取り巻いていた周囲の環境による所が大であると一般に説明されている。そしてそれに加えて彼が生きた時代の影響が強く作用している点が指摘される所である。確かにこうした外的要素が無視できないものであることは勿論であるが、私としては彼が先天的にもつていた性質に就てより強い注意が向けられるべきであると思う。具体的にいえば、彼が青春期に恋愛に失敗し一時的に狂気となつた事実と、彼の父親の弟つまり彼の叔父に頭のおかしい人物がいたという点である。サイヤッド・アブドゥッラーはミールの家系にこうした傾向があつたということを僅かに指摘しているが、私は今後ミールの人と作品の研究に心理学的な或いは精神病理学的な分析方法が用いられることによつて、ミール研究の新しい視角が生み出されるものと考ええる。こういった方法に立脚した文学研究が従来のウルドゥー文学では全たく行なわれておらず、私自身も未だ問題提起の段階に留まつている。例えば、昨年のこの大会で発表したウルドゥー現代作家サアード・ハサン・マントーにしても、彼の後期の作品とアルコール中毒によつて引き起された幻覚、精神錯乱の關係などが非常に興味ありまた問題の核心を衝く研究対象となり得るわけである。

ミールがデリー時代に詩会で並み居る詩人達を前にして発表した叙事詩にアジガル・ナーマ（竜王の書）と題するものが

ある。これはミールが自分自身を山麓に住む巨大な竜に譬え同時代の詩人を或いは鼠、或いはさそりまたは百足などに見立て、この有會無會が集まつて竜に戦かきを仕掛けようとした所が、竜すなわちミールの一吹きで全滅してしまうといつた非常に誇大な内容のもので、さすがの詩人達も不快の色を露わにしミールも大いに蟬蹙を買ひ破目になつたという。またこれも有名な詩の一節に「わたしは全世界を覆つている、わたしの仰せられたことこそ権位である」という自分自身に「仰せられた」という敬語を用いているものもある。ミールの尊大さの程度を知る上で大いに参考にならう。今迄のウルドゥー文学史ではこういった現象はすべて、ミールが如何に自己の詩才に自信をもちまた彼の詩が実際に他を超越した優れたものであつたかということ为例証するものとして説明されているのであるが、私はこうした点を彼の精神構造の分析の面から捉えていきたいと考えている。

ミールは一七八二年すなわち六十才の時にデリーからラクナウに移住する。この時代のデリーは主権者のムガル朝が一七〇七年のアウラングゼーブの死後、王位継承の争い、マラータとの打ち続く抗争、それに加えて一七三九年のナーデル・シャーの侵略で致命的打撃を蒙つた上に、一七五六年にはアフマッド・シャーの略奪に遭うなどして最早やデリー周辺を名目的に統治している一王朝に過ぎない状況にあり、

詩人達がパトロンの保護を受けて安住していられるような時代ではなくなつていた。これに對してラクナウは一七二四年に中央から事実上独立したアワドの首都として繁栄を誇つていたわけである。こうしてデリーからミールだけでなくサウダー、ミール・ハサン、インシャー、マスハフイーなどの當時一流詩人がラクナウに移りそれぞれナワブを始めとする王侯貴族の被護を受けることになる。ミールのラクナウ入りに關しては一つの逸話が残つてゐる。彼がラクナウに到着した日に或る場所で詩会があり、彼はすぐにその詩会に出席したのであつたが、その時の服装がラクナウでは全たく流行らないデリースタイルのそれであつたので同席の者達の嘲笑と輕蔑の的となつた。詩の朗詠がミールに求められた時彼は悲哀に満ちた切々たる句を披露し、始めてこの時代遅れの服装に身を包んだ老詩人が余りにも高名なミールであることを知つた同席者達を深く恥入らせたという。

ラクナウでのミールはナワブのアーサフツダウラーが月に三百ルピーの手当によつて彼のパトロンとなり、これが次のナワブであるサアダードット・アリー・ハーンにも引き継がれてゆく。しかしミールはこれらのパトロンに對しても自から頭を下げることもなく己れを高く持している。アーサフツダウラーが詩を所望しても「詩というものはポケットに入つていてそれをすぐに取り出せるといつたようなものではな

い」と答えて仲々作らないし、遂にはナワブが自分の詩を聞いている時に熱心に敬意を以て聞かないということに立腹して宮廷に出向くことを止めてしまつてゐる。ナワブの方からの手当はそれでも絶えることなく届けられていた。サアダードット・アリー・ハーンの時代になると全たく宮廷に出入りせず、彼の寄越した使いに對して「ナワブが自分の国の王なら私もまた自分の国の王である」と答えてゐる。また、ラクナウを訪問する政治家や名士が高名なミールを宴に招いても「私の詩が分かりもしないのにたゞ褒美などを呉れようとする連中と会うのは侮辱以外の何物でもなからう」といつて決して応じることがなかつたと詩人伝アーベ・ハヤートの著者ムハンマド・フサイン・アーザードは伝えてゐる。

此処で興味あるのはミールが一八〇〇年にカルカッタに設立されたフォート・ウイリアム・カレッジのムンシー採用試験に老齡のため面接で落ちてゐるというのである。アブドウル・ハックはこの事件を惜んで「もしミールがこの時に選ばれていたらならばミール・アンマンの、バーグ・オ・パハール」の如くウルドゥー散文学史上に不朽の傑作を書いていたかも知れない」と述べてゐる。私としてはミールがこのフォート・ウイリアム・カレッジの面接を自分から進んで受けたのか、或いは周囲の推薦または強制によつて応じたのか、問題とされる所であるが、この事件を紹介してゐるミルザ

1・アリー・ルトウフのウルドゥー詩人伝グルシヤネ・ヒンド——この詩人伝に就ては第十八会大会で発表した——にもその間の事情は何ら記されていない。考えられることは、彼が当時金銭的に非常に困窮していたため進んで応募したのか、自分こそフォート・ウイリアム・カレッジのムンシーとして最も適当な人物であると自負して応じたのか、という点であるが、またそのいづれでもなく単に国中の著名な文学者や詩人が候補者として選ばれた段階でミールも入つていたに過ぎず、彼自身は別にとりわけ関心をもつていたわけではないとも考えられる。いづれにせよミールは晩年をカルカッタで過ごすことにはならず、一八一〇年にラクナウの地で生涯を閉じたのである。彼の性格を特徴づけていた強い自尊心、高慢さ、狭量、利己主義、非社交性、憂鬱症などは最後迄変らなかつたようである。

次にミールの作品に就て見てみることにする。叙情詩ガザルに於て彼が選んだ主題は人生の苦悩と悲哀であるが、それも生きることの苦しさ悲しさを詠んで聞く者をして泣かせるのではなくミール自身自身が泣いている所に特徴があるといえる。いわばミールの詩の言葉そのものが彼の心の内面を卒直に表現しているわけで、従つてその詩句は語りかけてくるように簡潔で流麗な響きをもつてゐる。

今このことを作詩の技巧の面からいえば、ミールは語の撰

択に際して音楽性、情緒性を先ず第一に心掛けてゐる。これは、詩の調子の良さを優先させるために文法に反する用法をも敢えて行なつてゐることにほつきり現われている。また、自然の会話的調子を詩に導入して聞いている者が詩の内容を易しく理解できるように留意してゐることも挙げられる。韻律に音楽性を重んじたことは、同じ語の繰返しを多用したことからも明らかである。パッター・パッター、プター・プター、ハール ハマラー ジャーネー ハイ、ジャーネー ナ ジャーネー グル ヒー ナ ジャーネー バグ ト サラー ジャーネー ハイ という非常に有名な句で始まるこの叙情詩はまさにその韻律の美しさによつてミールの詩才を最も良く表わしたものの一つといふことができよう。因みにこの詩句の意味は劉廷芝の有名な「年年歳歳花相似 歳歳年年人不同」と同じような人生への無常感をこめたもので、時代も場所も全く違つた次元で詠まれたこの両詩句の類似に強く感じさせられるものがある。

此処でウルドゥー叙情詩の二大巨匠であるミールとガザルに就て些かの比較を試みる必要があるであらう。先ずミールのことをガザルが「ガザルよ、ウルドゥー詩の師匠はお前だけではないのだ、前の世にミールなる者がいたと人はいつている」という詩句で師匠として認めてゐることは良く知られてゐるとはいへ、この両詩人の叙情詩の優劣を論じる

ようなことは私には容易になし得ない所なので、此処には両者の人生観というか生き方の相違を示すことにする。先ず、人生の苦痛という両詩人に共通の主題を見ると、ミールの苦痛は彼の人生に則した現実のものであるのに対しガーリップのそれは健全な社会人から出たものであつてより哲学的な内容をもつたものであるといえる。このことは裏返せばミールの詩には哲学的・思想的な深みが少ないということになる。実

際に二人の実生活を比較して見ればすぐに分かるようにミールは一生を困窮の中に過し、非社交的で孤独を愛し、偏屈で暗い感じにつきまとわれているのに対して、ガーリップの方は極めて社交的で他人との談話を樂しみ、開放的な明るい人物である。上流社会に身を置き年金の訴訟に走り賭博に手を出しまた酒をたしなむガーリップの日常がミールのそれとは可成り異なつた次元のものであつたことは疑いもない。ガーリップがデリーのムガル宮廷に深く関係していたこともミールとの著じるしい違いである。またミールが無力なものへの興味を詩に示しているのに対してガーリップは非凡な資質への讚美を表わしているなど両者の差異は著じるしいものがある。まさに対象的な陰と陽である。

一般に詩人に就ての評価をなそうとする時にその作品に目を奪われそこに優れた技巧をもつて展げられた思想によつて詩人を測らうとするあまり、作品の中での詩人と実生活に於

ける詩人との懸隔を見落としてしまふ恐れがある。神秘主義詩人、革命詩人などという評価にこうしたものが見出されるが、ミールとガーリップの詩を論じるに際してもこうした実生活上の諸事実は重要な手がかりとされねばならないと思う。尤もミールの詩を好むかガーリップの詩により引かれるかは結局は全たく主観的な問題であらう。

ミールが詠んだ詩は現在、大冊のミール全集として出版されている。詩の他にも彼には最初のウルドゥー詩人伝とされるニカートウツシュアラールと自叙伝のズイクル・ミールといういづれもベルンヤ語で書かれた作品が存在しており両者ともウルドゥー文学史上に貴重な資料として名を列ねている。このウルドゥー詩人伝は一七五一年に書かれたものであるがこれを見ても集録されているウルドゥー詩人百三人がいづれもミールの辛辣な批評に曝されているのが分かる。彼ミールが自分自身を他の詩人達よりも優れた存在であると考へていたことはこれによつても判然としてゐる。

ウルドゥー叙情詩の二大詩人であるミールとガーリップのうち、ガーリップは一昨年その没後百年祭をインド・パーキスタンを中心に盛大に祝われたが、ミールに就てはガーリップに較べて研究も着実ながら地味に行なわれているのは彼自身の生き方に関係する所が少なくないようである。機会を得て作品の紹介を試みたい。